五世紀後半代から六世紀前半代における須恵器生産の拡大

植野　浩三

はじめに

古墳時代中期前半代に須恵器生産の技術がもたらされ、操業が開始して以降、須恵器は各地で生産されるようになった。筆者は、とりわけ初期須恵器段階の生産のあり方を整理して、考察したことがある。[1]その概要は、初出期がTG二三二型式の段階であり、渡来型として認識できる。その後、陶邑窯等で一旦定着した後、次に波及して各地で生産を開始する。特に、陶邑窯から地方に最初にもたらされたのは、ON四六段階であり、国内波及型として捉えられ、地方窯の第一の拡散とした。続くTK二三型式段階にはさらに拡大して地方窯が成立するため、これを第二の拡散として捉えた。こうした拡散は偶然ではなく、政治的な諸関係の中で波及が行われ、当時の政治的秩序を構成する面においても一つの手段として利用されたと考えたのである。[2]

しかし、前稿では初期須恵器窯の開始と展開を中心に取り上げたため、第二の拡散期として捉えたTK二三型式・TK四七型式の段階およびその前後の窯跡については、模式図を提示し、その意義について手工業生産との関係から若干触れたのみで、充分な整理を行っていなかった。[3]拡散を検討して論考する為には、当該期の窯跡の検討が最低条件となるのである。

従ってここでは、こうした第二の拡散期に該当する窯跡を概観し、その状況を整理してみる。そして、その成果から須恵器生産の状況と傾向についてまとめ、若干の方向性を示すことにする。

一、第二の拡散期前後の窯跡

日本各地における当該期の窯跡は以下の通りである。参考資料として初期須恵器段階の窯跡と、若干時期の下る窯跡も含めている。以下、地域ごとに各窯跡の位置や出土資料の概要を記す。尚、ここでは併行関係を明らかにするために、陶邑窯での型式名を用いる。

(1)九州地方

九州地方には、四ヶ所の窯跡が所在する。福岡・佐賀県において確認されており、TK二三型式から以後のものが存在する。

神籠池窯跡　佐賀市久保泉町に所在する。神籠池内にあるため発掘調査はされていない。採集遺物として、蓋杯・無蓋高杯・高杯形器台がある。いずれも各部に鋭さを残しており、TK二三型式から始まるものと、後続して操業されるものの二者に分かれる。

小隈窯跡　福岡県朝倉郡夜須町下高場に所在する。現在二基の窯が確認されているが、いずれも初出期のものである。しかし、周辺の採集資料の中にはTK二三から四七型式併行段階のものを含むため、継続して営まれた可能性もあるため記しておく。

山隈窯跡　福岡県朝倉郡三輪町三並に所在する。小隈窯跡と同様に初出期の窯が四基確認されているが、出土・採集遺物の中にTK二三型式併行期まで下る遺物も含まれることから、継続して営まれた可能性があるため記しておく。

新開窯跡　福岡県西区今宿新開に所在する。第一の拡散期（ON四六段階）に相当する遺物群と、やや下ってTK二三型式併行期のものと、それ以降のTK四七型式・MT一五型式併行期のものが存在し、継続して操業されたことが窺える。各期の遺物は蓋杯が量的に多いが、その他、高杯・器台・鼓・直口壺・甕・焼台等がある。

重留窯跡　福岡市早良区重留に所在する。蓋杯・高杯・鼓・器台が出土しており、比較的口径の小さい蓋杯は、明確な段を有し、TK四七型式の名残りをもつが、蓋杯の端部や長脚一段透しの高杯は新傾向を示していおり、MT一五型式併行期と判断できる。

稲元日焼原窯跡　福岡県宗像市稲元に所在する。周辺には多数の窯跡が存在するが、その内の四基が調査されている。一号窯の遺物は、TK四七型式併行期のものが主体であり、蓋杯・高杯・甕が存在する。その後、四・三・二号窯へと続いて操業されており、MT一五からTK一〇型式併行段階に該当する。

その他の窯跡　ほぼTK一〇型式併行期に開始する窯跡について触れておく。福岡県牛頸窯跡群は、六世紀代から九世紀初頭までの間に三〇〇基以上の窯が築かれており、九州一の規模を誇る。当群内の野添六号窯跡を始まりとし、以降継続する。八女窯跡群は一〇基以上の窯跡が知られ、中尾谷一～三号窯が当該期の可能性を示し、以後継続する。福岡県裏ノ田窯跡も新段階の当該期の可能性をもつ言う。

(2)中国・四国地方

中・四国地方では、当該期の窯跡は山陰地方を除いて不明な部分が多い。逆に山陰地方では、採集資料を含めて六ヶ所において確認されており、貴重な資料が提出されている。

戸瀬池窯跡　岡山県和気郡佐伯町矢田部に所在する。MT一五型式併行期とやや新しい時期の窯跡である。岡山県では現在のところ、初出期の奥ヶ谷窯跡に次ぐ古段階の窯跡として位置づけられている。

資料には、蓋杯・甕が存在する。続く型式では、邑久郡長船町木鍋山一号窯跡の一基が確認されている。参考のために触れておく。

日脚一号窯跡　島根県浜田市日脚町に所在する。発掘調査により、蓋杯・高杯・甕・瓶・直口壺等が出土している。出土資料には肥厚するものが多いが、精巧なものも若干含まれ、おおむねＴＫ四七型式併行期と判断できる。

深谷窯跡　島根県平田市本庄町に所在する。やや新しいが、参考のために掲載する。出土資料はＭＴ一五型式に該当する。

大井窯跡群　島根県松江市大井町に所在する。大きく九地区に分かれて窯跡があり、このうち廻谷窯跡・寺尾窯跡においてやや古相の須恵器が採集されているため、操業がこの時期から始まったとされる。ＴＫ四七型式でも新段階併行期と判断できる。以後、岩汐支群においてＴＫ一〇型式の窯跡が確認されている。

門生窯跡群　島根県安来市門生・高畑に所在する。尾根を隔てて高畑地区と黒谷・山根地区に分かれて、二基以上存在する。山根一号窯は近年発掘され、良好な資料を含む。この中にはＴＫ二三型式の特徴を備えるものが含まれが、全体的にＴＫ四七型式併行期のものが多い。高畑地区は採集資料ではあるが、ＴＫ四七型式併行期のものがある。山根地区から高畑地区への窯跡の移動が考えられる。

埴見窯跡　鳥取県東伯郡東郷町埴見に所在する。蓋杯・無蓋高杯・瓶が採集されており、この期の窯跡の可能性が示されている。少量のため全体的な把握は難しい部分はあるが、ＴＫ四七型式併行段階と考えられ、その後の時期の窯もある。

七谷窯跡　鳥取市久末に所在する。発掘調査は行われていないが、ＴＫ四七型式併行段階と考えられる須恵器が採集されている。五～六基の窯跡群の可能性が示されており、当該期の遺物の他は、六世紀後半代のものである言う。また、近隣には六世紀中頃から後半代の中谷窯跡、六世紀後半代の越路窯跡が所在する。

その他の窯跡　四国地方では香川県三郎池西岸窯跡と宮山一号窯跡が初期須恵器の段階の窯として存在するが、以降は六世紀後半代まで不明である。わずかに香川県中多度郡多度津町白方所在の、黒藤窯跡が六世紀中頃に遡る可能性があるという。

(3)近畿地方

近畿地方には多数の窯跡が確認されている。大阪府陶邑窯・千里窯を最大として、兵庫県で六ヶ所、京都府・和歌山県の各地で多くの窯が成立しており、総数一〇ヶ所におよぶ。

那波野丸山窯跡群　兵庫県相生市那波野に所在する。周辺地域には平安時代までの窯跡が約一三〇基あまり存在し、相生窯跡群と呼ばれている。那波野丸山には七基以上の窯が存在していた。那波野丸山三号窯跡が最古であり、ＴＫ四七型式併行期と考えられ、続いて二号窯、一・四号窯跡が築かれる（ＭＴ一五～ＴＫ一〇型式）。

金ヶ崎窯跡　兵庫県明石市魚住町に所在する。発掘調査が行われ

ている。出土須恵器には、蓋杯・高杯・瑞・器台・甕・椀・提瓶等があり、MT一五型式の特徴を備えている。また、角杯形須恵器が出土している。付近にはやや下る窯跡が数基存在し、さらに古代にかけては高丘窯跡（二一基）と魚住窯跡（四一基）が操業を繰り返している。

三田末郡塚窯跡群　兵庫県三田市末野にかけて所在する。周辺では一六基以上の窯跡が確認されている。郡塚一号窯跡は、発掘調査により蓋杯・高杯・甕・器台・瑞等が出土し、TK二三型式に属する。その後、六世紀末以降に周辺で操業が行われる。

猫谷窯跡　兵庫県多紀郡丹南町一印谷に所在する。窯体は調査されていないが、周辺部の調査によって窯の存在が濃厚になった。須恵器には蓋杯・高杯・瑞等があり、ほぼTK四七型式に比定でるが、やや古相のものも若干含まれる。

鬼神谷窯跡　兵庫県城崎郡竹野町鬼神谷に所在する。三基の窯跡が確認されており、一号窯床面資料がMT一五型式に比定できるが、周辺部からTK四七型式の資料が出土しており、この時期が操業の開始期にあてはまり、短期間であるが多少継続して操業されている。

中尾窯跡　兵庫県養父郡関宮町三宅に所在する。蓋杯・甕が採集されており、MT一五型式に該当する。

千里古窯跡群　大阪府吹田市から豊中市の千里丘陵一帯に所在する。千里窯跡群は、大きく東方の吹田窯跡群と西方の桜井谷窯跡群に大別できる。吹田窯跡群では、初出期TG三二三型式段階の吹田三二号窯跡や、TK七三型式段階の吹田五四号窯跡が存在するため、初期の段階から継続して操業が行われている。その後、桜井谷窯跡群では、TK二〇八型式の段階に二―二（下地蔵ヶ岡）窯跡が、TK二三型式の段階に二―一六（羽鷹池東畔）窯跡が成立し、以降、継続して操業が認められる。また、吹田窯跡群では、五四号窯跡の後、しばらく間隔があくが、TK四七型式頃から確認できるようになり、以後、桜井谷窯跡群から吹田窯跡群へと操業の中心が移っていくとされる。

陶邑古窯跡群　大阪府堺市を中心とする泉北丘陵から周辺地域の広大な範囲に所在する。古代にはいると窯の数は減少していくが、総数一五〇〇基とも言われる窯が存在する。言うまでもなく、日本における中心的な窯跡群であり、初出期の大庭寺遺跡（TG二三一・二三二号窯跡）から始まり、以降生産を増大しながら継続して操業が行われる、日本の中心的な窯業地帯である。

沙羅谷窯跡　和歌山県和歌山市吉礼に所在する。五基以上の窯跡が存在すると言われ、五―Ⅱ号窯では埴輪も併焼され、六世紀初頭から前半代に属するという。その他の窯は、六世紀後半代と八～九世紀の時期である。尚、当地で採集された遺物には、初期須恵器段階のものがあり、操業の開始はさらに遡るとも言われている。

園部窯跡群　京都府船井郡園部町に所在し、三〇基を越える窯跡が確認されている。その内、大向一号窯跡が最古の窯とされ、有蓋高杯と蓋が採集され、TK四七型式に比定できる。また、同時またはそ

の直後に成立した窯に、桑ノ内六号窯があり、続いて大向二号窯跡がある。その後、生産が継続するようである。

泉窯跡　滋賀県甲賀郡水口町泉に所在する。採集された遺物には複数時期のものがあるため、複数の窯体の可能性が指摘されている。蓋杯・高杯・器台・甕・短頸壺があり、TK二三型式の特徴をもつものがある。現在の段階で滋賀県最古の窯である。

鏡山窯跡群　滋賀県蒲生郡竜王町から野洲郡野洲町にまたがる窯跡群である。一一支群に分かれ、一〇〇基におよぶ窯が存在する。若干新しいが、入町支群と山面支群においてMT一五型式の須恵器が確認されている。当窯跡群は、さらに遡る可能性も指摘されている。

(4)東海地方

東海地方では、三重県から愛知県さらに静岡県の西部にかけて、連続して多数の窯跡が存在する。特に東山窯跡群とその周辺は、初期の段階から操業されており、以降引き継がれているのが特徴である。

久居窯跡群　三重県久居市藤ヶ丘に所在する。四基の窯が存在し、ほぼ同時に操業されたと考えられる。良好な出土遺物は二・四号窯跡のものがあり、TK二三型式と判断でき、陶邑窯の須恵器の特徴を有している。埴輪を併焼している。

藤谷窯跡　三重県津市垂水に所在する。久居窯跡の近隣に位置し、周辺は多数の窯が築かれていた。一九七五年に二基の窯跡が調査されている。少量の須恵器と埴輪が出土しており、須恵器はTK四七型式になる。さらに一九八一年、埴輪窯が確認された。

内多窯跡群　三重県安濃郡安濃町内多に所在する。一九三九年頃に発見されていたようで、三基の窯が存在した。埴輪も同時に採集されている。現在確認できる須恵器は蓋杯のみであるが、蓋杯は薄手のもので、TK四七型式に比定できる。

徳居窯跡　三重県鈴鹿市南方から安芸郡河芸町にかけて所在する。稲生窯跡の南西にあり、四二基が確認できるという。一号窯がTK四七型式に比定出来そうである。

稲生窯跡　三重県鈴鹿市稲生町に所在する。四基の窯跡が確認されており、一九六一年に二基が調査されている。出土須恵器はわずかのようであり、TK二三型式に比定できる。埴輪を併焼している。

小杉大谷窯跡　三重県四日市市大谷代に所在する。一九七三年に発掘調査され、蓋杯・高杯・瑯・短頸壺・甕等が出土している。全体的に肥厚するものが多く、TK四七型式併行期と考えられる。埴輪を併焼している。なお、近接する場所に六世紀後半期の西ヶ谷窯跡があり、採集資料として小杉大谷窯跡と同種の須恵器が紹介されているが、西ヶ谷窯跡がこの期に操業したか否かは定かではない。

東山窯跡群　愛知県名古屋市昭和区にかけて所在する。東山窯跡群を含めた東西・南北約二〇㎞四方の範囲に窯跡群が群集し、広く猿投山西南麓古窯跡群（猿投窯）と総称される日本でも有数の窯業地帯である。須恵器・灰釉陶器の窯は約五〇〇基、平安時代末からの山茶

碗の窯も約五〇〇基存在するという。しかし、古墳時代の窯跡は東山地区（東山窯跡群）に限定できる様である。

東山窯跡群では、TK二一六型式の最終段階併行期と考えられる東山一一一号窯跡や、ON四六段階併行期の東山四八（二一八－I）窯跡が既に存在し、その延長線上で継続して操業が行われる。TK二〇八型式併行の段階の窯は未確認だが、TK二三型式併行期の窯には東山一一号窯跡等がある。これに続くMT一五型式併行期の窯としては、東山一〇号窯の他、八基確認できるといい、以降未確認の段階もあるが、継続して操業されており、埴輪も併焼されている。

下原窯跡群　愛知県春日井市下原に所在する。七基の窯が狭い範囲に存在しており、発掘調査が行われて、公園として整備も進んでいる。出土資料は蓋杯・高杯・鼓・壺・甕・甑等である。高杯の長脚化や蓋杯の形態・端部の退化から、MT一五型式併行期と考えられる。埴輪も併焼されている。

卓ヶ洞窯跡群　愛知県尾張旭市卓ヶ洞から霞ヶ丘町に所在する。六基から構成されていたようであり、二・三・四号窯は古代に下る時期であるが、一・五号窯はMT一五型式併行期として良さそうである。蓋杯・高杯・鼓・器台等が確認されており、一号窯跡からは埴輪が出土している。尚、当窯跡の東約二kmの地点には、ON四六段階の窯である城山二・三号窯が所在しており、やや断続の感があるが、この地域で継続して操業された可能性もある。

前山窯跡　愛知県常滑市金山に所在する。遺構は不明であるが、窯跡出土とする須恵器の蓋杯・甕が少量伝えられている。蓋杯は丸みが余りなく、口縁端部もやや鈍いという特徴があるが、相対的にTK二三型式併行期に該当すると考えられる。

上向イ田窯跡群　愛知県豊田市亀首に所在する。七基の窯跡が確認されており、古くに二基の窯が発掘調査されている。三・四号窯からは須恵器の他、埴輪も出土しており、併焼されたようである。須恵器は、MT一五型式併行期と考えられる。その他の窯は、断続的に七世紀前半代まで操業されている。

水神窯跡　愛知県豊橋市牟呂町に所在する。三基から構成され、埴輪も併焼されている。出土須恵器には、蓋杯・高杯・鼓・甕・器台等があり、端部の仕上げは鈍くなってきていることから、TK四七型式併行期と考えられる。

湖西窯跡群　静岡県湖西市から浜名郡新居町、さらには愛知県豊橋市にかけての浜名湖西岸の丘陵の南北八km、東西九kmの範囲に五世紀代から八世紀代の窯跡が一九八基確認されており、総称して湖西窯跡群と呼ばれている。

このうち明通り窯跡は、静岡県湖西市一の宮に所在し、古くに造成されて失われたが、その折りに窯壁とともに須恵器蓋杯・埴輪が採集されている。蓋杯は薄手のもので、稜や口縁端部も丁寧に面をもたせていることから、TK二三型式に比定できるものである。

また、近隣する一ノ宮峠場第一地点Ⅰ・Ⅱ号窯跡では、MT一五型式併行期と考えられる蓋杯・高杯・器台・甕とともに埴輪が出土しており、さらに東笠子第二五地点Ⅲ号窯跡もこの期に属することが言われており、周辺地域で継続して操業が行われた可能性がもたれる。

有玉窯跡　静岡県浜松市半田町に所在する。現在は一基のみである。蓋杯・高杯・甕と埴輪が出土しており、やや下がってTK一〇型式に比定できる。

安久路窯跡　静岡県磐田市西貝塚に所在する。一基の窯が確認されている。蓋杯・甕・鉢形状須恵器とともに埴輪が出土しており、古式の形態を留めるがMT一五型式に比定できよう。

衛門坂窯跡　静岡県袋井市岡崎に所在する。五基の窯が存在し、三・四窯跡で埴輪を併焼している。三号窯では蓋杯・高杯・甕等が出土しており、MT一五型式併行期と判断できる。

(5)北陸地方

北陸地方では長野県を含めて記述する。合計七ヶ所の窯跡が確認されており、TK四七型式のものは柳田ウワノ一号窯跡のみであり、MT一五型式併行期の窯跡が多い。

興道寺窯跡　福井県三方郡美浜町興道寺に所在する。発掘調査により蓋杯・高杯・提瓶・器台・瓶・甕の他、角杯形須恵器および埴輪が出土している。全体的に肥厚しており、MT一五型式に該当する。

鎌谷窯跡　福井県坂井郡金津町鎌谷に所在する。一九九〇年、窯跡が確認され、遺物が採集されている。採集遺物には、蓋杯・高杯・瓶・壺・甕・器台・甑があり、おおむねMT一五型式に相当するが、若干古相のものも含まれている。また、埴輪も同時に採集されており、併焼された可能性がある。埴輪には、わずかであるが外面に平行叩き目文、内面に同心円文を残すものがある。

小松窯跡群　石川県小松市二ツ梨町に所在する。小松窯跡群と総称される中に、当該期から一〇世紀にかけて一七〇基を越す窯跡が確認されており、北陸地方最大の規模をもつ。二ツ梨東山四号窯跡では、三次の床面が検出され、一次床面からは蓋杯・高杯・鉢・器台・瓶・壺・甕等が出土し、蓋杯はやや口径が大きくなり、天井部・底部も平坦化する傾向があり、MT一五型式に比定される。また、第二・三次床面では、やや遅れてTK一〇型式の須恵器が出土しており、継続して操業されたことが窺える。

羽咋窯跡群　石川県羽咋市柳田町に所在する。一三基の窯跡が確認され羽咋窯跡群と呼称される。柳田ウワノ一号窯跡の採集資料の蓋杯には、天井部が丸いものが多く、TK四七型式に比定できる。

鳥屋窯跡群　石川県鹿島郡鳥屋町深沢に所在する。鳥屋窯跡群内の深沢一号窯跡の資料は、古くから北陸地方最古の窯として紹介されたものである。蓋杯・高杯・壺が紹介されており、蓋はやや大型化の傾向を認め、端部の段も鈍くなっており、MT一五型式に比定できる。

園カンデ窯跡　富山県氷見市園に所在する。窯跡周辺から蓋杯・

甕・すり鉢・直口壺が採集されており、焼け歪みや焼け膨れした資料も含まれる。資料には小型でやや深めの杯も存在するが、相対的に大型化の傾向にあり、ＭＴ一五型式の古相に位置すると考えられる。

松ノ山窯跡　長野県長野市信更町に所在する。道路工事により発見された。採集資料には、杯蓋・瑯・甕・短頸壺があり、甕以外は完形品である。瑯は均整のとれたものであるが、口頸部の発達が認められ、蓋もやや平坦化して端部の段も鈍くなってきているため、ＭＴ一五型式の古相に相当すると考えられる。

(6)関東・東北地方

関東・東北地方では、現在のとこと当該期の窯として確認できるものは少ない。埼玉県・福島県の二ヶ所において確認されている。未確認の窯が多数存在する可能性がある。

桜山窯跡群　埼玉県東松山市田木に所在する。当所では二基の須恵器窯跡と一七基の埴輪窯跡が確認されている。須恵器窯跡は六号窯跡と八号窯跡である。六号窯跡では、蓋杯・高杯・提瓶・器台・甕が出土しており、ほぼＴＫ一〇型式に該当する。提瓶には波状文、甕の体部には螺旋状のカキ目を巡らしている。八号窯跡は六号窯跡より後出するが、ＴＫ一〇形式の範疇に収まると考えられる。大型化した蓋杯や特異な二段透しの高杯脚部が出土している。

なお、同県では、児玉町ミカド遺跡出土の窯壁が付着した須恵器の存在から、ＴＫ二三型式段階の窯の存在が言われている。

泉崎窯跡　福島県西白河郡泉崎村白石山に所在する。一九三四年に調査が行われ、一九八〇年になって当窯跡の遺物の可能性が高いとして紹介された。紹介された須恵器には蓋杯・有蓋高杯脚部・甕片があり、いずれも端部を鋭く仕上げているのが目立つ。報告者はＴＫ二三型式の古相とするが、さらに遡る可能性も考慮しておきたい。

なお、東北地方では、ＯＮ四六段階に成立した宮城県大蓮寺窯跡があり、遅れて金山窯跡、そして埴輪窯とされる富沢窯跡が存在することを付け加えておく。

二、第二の拡散期の窯の傾向

前章のように、ＴＫ二三型式以降に成立する窯は多数存在している。その一覧表が表一である。今回提示した窯跡群には、初期須恵器段階のものも含めている。特にこの中には、ＯＮ四六段階直後のＴＫ二〇八型式の時期に操業しているもの含まれ、第一・二の拡散と多少ずれるため、まずこの期の窯の状況について確認しておきたい。

該当する窯の内、福岡県山隈窯跡群は初出段階から当地域において操業が行われているといえる。同様なことは、愛知県城山窯跡群においてもいえ、近隣に東山窯跡群が存在し、その影響化で成立した可能性がある。宮城県金山窯跡においても、前段階に大蓮寺窯跡が存在しており、同様のあり方を示している可能性がある。従って、ＴＫ二〇

八型式の段階で操業しているものは、以後の経過は別にして、前段階において周辺部にその祖形とも言うべき窯が存在し、その影響あるいは継承のもとで成立した、言うなれば継続的な窯である。当然、陶邑窯跡群や千里窯跡群、そして可能性として東山窯跡群は、初出段階から継続して操業が行われており、以後も継続する。TK二〇八型式段階の窯の操業は、以上の通りであり、この段階の窯は単発的に発生したのではないことがわかる。

次に各地に窯が成立するのは、本稿で述べているTK二三型式の段階である。この期には、北部九州や山陰を中心とする中国地方、東海地方そして東北地方で確認されており、総数一三ヶ所になる。現状では、前段階から継続する窯跡群は限定され、この時期に新たに成立したものが九ヶ所ある。初期須恵器段階の窯跡を含めて当該期の窯の数はさほど多くない。これは密度と関係して、発見される頻度が少ないことが予想されが、本来の分布と数を示すものではないと考える。

続いてTK四七型式の段階である。この期の窯には、TK二三型式段階から継続するものと、新たにこの段階から始まるものとがある。この段階には、関東・東北を除いてほぼ全国的に認められ、総数二一ヶ所におよぶ。この期から始まる窯は一六ヶ所となり、前段階の状況から比較すると圧倒的に増加していることがわかる。ただし、各窯跡でTK四七型式と認定した資料には、TK二三型式の様相を残すものもあり、また、採集資料によって決定されているものが多く存在することから、前段階から引き続いて操業した窯も存在する可能性もあろう。

TK二三型式と四七型式に操業された窯の特徴を見てみよう。陶邑窯・千里窯・東山窯を除けば、TK二三型式に始まる窯は、現状では単発的なものが多く、後続性が認められない点が窺えよう。単発的なものには、神籠池窯跡・三田末郡塚窯跡・泉窯跡・久居窯跡・稲生窯跡・前山窯跡・明通り窯跡・泉崎窯跡とその数は八窯になる。一方、新開窯跡・門生窯跡は継続しており、単発とした久居窯跡においても藤谷窯に引き継がれる可能性があり、湖西窯跡群の明通り窯跡の直後は不明であるが、後続することも予想される。いずれにしても、TK二三型式段階では単発的で短期間のものが非常に多い。

しかし、TK四七型式の段階に成立した窯を見ると、単発的なものは非常に少ないことがわかる。単発的なものには、日脚窯跡・猫谷窯跡・鬼神谷窯跡・徳居窯跡・内多窯跡・小杉大谷窯跡・水神窯跡等の八窯があり、前段階の単発型とさほど数の上では変わらない。この中には、鬼神谷窯跡のようにMT一五型式まで存続するものもあり、必ずしも純粋な形とは言えない。しかし、以後継続するものが多く確認できる点は、最大の特徴になる。確実に継続するものは、稲元日焼原窯跡・那波野丸山窯跡・園部窯跡であり、TK四七型式からTK一〇型式まで存続する。同様に大井窯跡・沙羅谷窯跡、加えて埴見窯跡・七谷窯跡・羽咋窯跡でも継続の可能性がある。

継続型の窯跡群を少し見てみよう。稲元日焼原窯跡群は、周囲東西四㎞、南北二㎞の範囲に六世紀後半代以降の窯も含めて約三〇基存在するといい、この地域の中心的な窯跡群になっている。また、相生窯跡群の一部である那波野丸山窯跡群は、古墳時代の窯跡が六基が知られ、六世紀後半代まで操業する。相生窯跡群としては、七世紀になると北側の丘陵に移動し、以後広範囲に場所を変えて一二世紀代まで生産が行われ、この地域の中心的な窯跡群であり、約一三〇基が確認されている。園部窯跡群も同様であり、六世紀代から古代にかけて三〇基以上の窯跡が確認されている。大井窯跡群は総数は不明であるが、九地区に分かれて窯が存在し、六世紀代から古代に至る中心的な窯跡群であることからして同類の可能性が強い。

そうすると、背後に四〇基以上の窯跡が確認できる稲生窯跡群を含めた徳居窯跡群は、六世紀後半代の窯跡も確認されていることから、前述の継続型になる可能性がもたれる。また、小松窯跡群では、現段階ではMT一五型式から生産が明らかであるが、以後連綿と継続して一〇世紀まで窯が築かれおり、その数も一七〇基におよぶと言い、北陸地方最大の規模を誇る。前述の例に合わせると、初源がTK四七型式あるいはTK二三型式段階まで遡ることも考えられ、同じような継続型になる可能性ももたれる。その他、各地での窯跡の検討が必要であるが、規模の大小はあれ、こうした継続型に該当する例は増加するだろう。

いずれにしても、第二の拡散期であるTK二三・四七型式期には、単発的なものがある一方で、以後継続していくものがあり、特にTK四七型式段階からは継続するものが増加する傾向が強く、各地において中心的な窯業地帯に成長していった例が多くあるのが特徴である。

最後に、埴輪生産を伴う窯について触れておこう。埴輪併焼窯については、筆者を含めて古くから指摘されている。表一でも明らかなように、その中心は東海地方から北陸地方であり、関東地方でも新段階で確認できる。わずかに北部九州では、初出期の山隈窯跡において確認されており、和歌山県沙羅谷窯跡でも確認できる。近畿地方においては、極く限られた時期に限られた場所で併焼された可能性も指摘されているが、それは例外である。また、埴輪に須恵器の技法を残したものや、奈良県ウワナベ古墳の須恵器のような併焼の例が少数確認できるが[4]、普遍的ではない。ただし、大阪府淡輪地方から和歌山県にかけての古墳では、叩き痕をもつ埴輪が多量に確認されており、和歌山県沙羅谷窯跡と通じている。

西日本では、今後例外的に埴輪生産との関連性を示す資料が確認されることは予想されるが、東日本での普遍的なあり方に同調しないことは確実である。和歌山県沙羅谷窯跡のあり方は、近畿地方でも特殊である。埴輪における淡輪技法は、淡輪から和歌山県にかけて、さらに伊勢と遠江にかけて顕著であるという[5]。須恵器・埴輪併焼窯のみの現象ではこれらの地域は重なるが、各窯跡の中には久居・藤谷窯跡、

表１　窯跡一覧表（参考のために初期段階と後出段階の窯跡も含めている）

地域	窯跡名	所在地	所属時期 TG231	TK73	TK216	ON46	TK208	TK23	TK47	MT15	TK10	埴輪	備考
九州	神籠池窯跡	佐賀県佐賀市久保泉町							--				
	小隈窯跡	福岡県朝倉郡夜須町下高場		---	---		---	---					
	山隈窯跡	福岡県朝倉郡三輪町山隈				--		---				○	
	八並窯跡	福岡県朝倉郡夜須町三並											
	隈・西小田窯跡群	福岡県筑紫野市隈			-- ---								
	新開窯跡	福岡県西区今宿新開											
	重留窯跡	福岡市早良区重留											
	稲元日焼原窯跡	福岡県宗像市稲元											
	裏ノ田窯跡	福岡県太宰府市水城											
	牛頸窯跡群	福岡県大野城市牛頸・他											
	八女窯跡群	福岡県八女市他忠見区											
	居屋敷窯跡	福岡県京都郡豊津町居屋敷											
中国・四国	奥ヶ谷窯跡	岡山県総社市福井											
	戸瀬池窯跡	岡山県和気郡佐伯町矢田部											
	木鍋山一号窯跡	岡山県邑久郡長船町											
	日脚１号窯跡	島根県浜田市日脚町											
	深谷窯跡	島根県平田市本庄町											
	大井窯跡群	島根県松江市大井町							---				魁谷・寺尾窯跡
	門生窯跡群	島根県安来市門生・高畑											高畑・山根窯跡
	埴見窯跡	鳥取県東伯郡東郷町植見											
	七谷窯跡	鳥取県鳥取市久末											
	市場南組窯跡	愛媛県伊豫市市場											系譜が異なる
	宮山窯跡	香川県三豊郡豊中町比地大	?	?								?	
	黒藤窯跡	香川県中多度郡多度津町白方									-?-		
	三郎池西岸窯跡	香川県高松市三谷町											
近畿	那波野丸山窯跡群	兵庫県相生市那波野											
	金ヶ崎窯跡	兵庫県明石市魚住町									---		
	三田末郡塚窯跡群	兵庫県三田市末野											
	出合窯跡	兵庫県神戸市西区玉津町											４C代、TG231以前
	猫谷窯跡	兵庫県多紀郡丹南町一印谷						-					
	鬼神谷窯跡	兵庫県城崎郡竹野町鬼神谷						-					１号窯
	中尾窯跡	兵庫県養父郡関宮町三宅											
	千里古窯跡群	大阪府吹田市～豊中市		-	---	----							
	陶邑古窯跡群	大阪府堺市～											
	一須賀窯跡群	大阪府南河内郡河南町東山		---									
	園部窯跡群	京都府船井郡園部町											大向１・桑ノ内６・大向２
	泉窯跡	滋賀県甲賀郡水口町泉											
	鏡山窯跡群	滋賀県蒲生郡竜王町～野洲郡野洲町										○	人町・山面支群
	沙羅谷窯跡	和歌山県和歌山市吉礼								---		○	
東海	久居窯跡群	三重県久居市藤ヶ丘										○	
	藤谷窯跡	三重県津市垂水										○	
	内多窯跡	三重県安濃郡安濃町内多										○	
	稲生窯跡	三重県鈴鹿市稲生町										○	
	徳居窯跡	三重県鈴鹿市南方～安芸郡河芸町										○	
	小杉大谷窯跡	三重県四日市市大谷代										○	
	東山窯跡群	愛知県名古屋市昭和区	---	---	--		---					○	
	下原窯跡群	愛知県春日井市下原										○	
	卓ヶ洞窯跡群	愛知県尾張旭市卓ヶ洞～霞ヶ丘町										○	城山窯に近接。
	城山窯跡群	愛知県尾張旭市城山町										○	
	前山窯跡	愛知県常滑市金山										?	
	上向イ田窯跡群	愛知県豊田市亀首										○	
	水神窯跡	愛知県豊橋市牟呂町										○	
	湖西窯跡群	静岡県湖西市～浜名郡新居町							---			○	明通り・一ノ宮峠場窯跡
	有玉窯跡	静岡県浜松市半田町										○	
	安久路窯跡	静岡県磐田市西貝塚										○	
	衛門坂窯跡	静岡県袋井市岡崎										○	
北陸	興道寺窯跡	福井県三方郡美浜町興道寺										○	
	鎌谷窯跡	福井県坂井郡金津町鎌谷							---			○	埴輪に叩きあり。
	小松窯跡群	石川県小松市二ツ梨町							---				二ツ梨東山４号窯跡
	羽咋窯跡群	石川県羽咋市柳田町								---	--		柳田ウワノ１号窯跡
	鳥屋窯跡群	石川県鹿島郡鳥屋町深沢									--	?	深沢１号窯跡
	園カンデ窯跡	富山県氷見市園									--		
	松ノ山窯跡	長野県長野市信更町										?	
関東東北	桜山窯跡群	埼玉県東松山市田木										○	
	泉崎窯跡	福島県西白河郡泉崎村白石山											
	大蓮寺窯跡	宮城県仙台市宮城野区東仙台											
	金山窯跡	宮城県仙台市太白区西多賀											

あるいは愛知県の各窯跡のように淡輪技法をもたないものもあり、複雑な様相になる。いずれにしても、首長層による手工業生産の掌握の仕方や、専門工人の組織編成のあり方が須恵器と埴輪生産に反映されており、地域によるこの違いは注目される事柄である。

三、陶邑窯との関係

各窯跡群の遺物についてみてみよう。各器形をすべて揃える良好な資料は少ないが、代表例をあげて比較していこう。

ＴＫ二三型式期では、古くから三重県久居窯跡が有名である。同窯の須恵器は形態的にも技法的にも、陶邑窯と共通する部分が多いことは先学の説くところである。[6] しかし、これを純粋なＴＫ二三型式に比定することに疑問を投げかける人もいる。[7] 確かに、蓋杯・高杯の細部において、鋭さを失いかけているものもあるし、小型化の傾向を示す資料も含まれているのも事実である。その一方で、依然と薄く作り、端部の仕上げは面をもたせて鋭くするものも存在し、瓶や直口壺の形態からしても、開始時期はＴＫ二三型式でよいと考えられる。前山・明通り窯跡、神籠池窯跡の資料は少量であるが、同様の型式である。

兵庫県三田末郡塚窯跡の資料は、薄く製作したものが多く、端部の仕上げは鋭いものとやや鈍いものに分かれるが、開始時期はＴＫ二三型式でよいと考えられる。島根県門生窯跡群の資料においても二者が存在する。先行すると考えられるものは鋭さを有し、ＴＫ二三型式に比定できる。福岡県新開窯跡においても鋭さを有するものが少量含まれ、ＴＫ二三型式に比定できる。ただし同窯の場合は、先行する遺物群（ＯＮ四六段階）があり、どのように関わったかは不明であるが、確実にＴＫ二三型式に操業が定着している。

以上のように、ＴＫ二三型式期に成立した窯は、器形の組成や形態、特に蓋杯の形態および端部の仕上げの状況は、陶邑窯とかなり共通している。ただし、端部の鈍い一群は工人の差、または多少の時間差で生じた可能性が強いため除いて考えると、基本的に陶邑窯の強い影響の元で成立し、操業を開始したことが窺われる。

ＴＫ四七型式期でも同様に陶邑窯との共通性を認めるが、この中には二つの様相がある。兵庫県鬼神谷窯跡では、ＳＸ一の資料の中に幾つかのタイプが存在するが、その中には陶邑窯のＴＫ二三から四七型式にかなり類似するものが含まれており、開始期のものとされる。その後、伝統的な形態は引き継ぎながらも地方色が芽生えてくる。

愛知県水神窯跡では、蓋杯の底部・天井部が平坦なものと丸みを帯びるものが存在し、口縁端部も明瞭な段を有するものと、段が不明瞭になるものとがあるが、この中の一部は、陶邑窯ＴＫ四七型式とかなり類似したものがある。三重県小杉大谷窯跡もよく似た傾向であるが、比較的陶邑ＴＫ四七型式に類似したものが多くある。

同じように稲元日焼原窯跡や那波野丸山窯跡、猫谷窯跡、羽咋窯跡

群（柳田ウワノ一号窯跡）、泉窯跡、園部窯跡群の資料においても、陶邑窯との強い類似性を認める。従って、ＴＫ四七型式段階の生産の成立には、前段階と同じく陶邑窯の影響が強いと考えられる。これは既に先学が示していることであるが、改めて確認しておく。

しかし、愛知県東山窯跡群に限って言えば、全体の器形の構成は大筋において各地の窯に準じるが、各部の形態や細部の仕上げにかなりの特色があるのである。これは、東山窯跡群が須恵器生産の初出期から成立し（現状では東山一一一号窯が最古の窯跡であるが）、以降絶えることなく継続したことが要因と考えられ、基本的な組成や相対的な形態の流れは陶邑窯と対比させながらも、独自の形態の須恵器を製作して行った。これは城山窯跡にも影響を与えている。

ところが、東山窯跡群に近接する前山窯跡や水神窯跡、明通り窯跡等の尾張南部から三河・遠江地方の窯では、東山窯の影響を受けずに陶邑窯に類似し、さらに西側の三重県の諸窯も同じあり方を示し、全国的な規模で行われた陶邑窯からの須恵器生産の拡散に対応しているのが重要である。菱田哲郎氏は、特に有蓋高杯の脚部形態に注目して同様な方向性を示すとともに、[8]陶邑窯内での差と地方窯との比較を試みている。山田邦和氏も同様な見解に立っている。[9]

ただし、ＴＫ四七型式以降に成立する窯の中には、陶邑窯からの直接的影響と間接的影響が存在する可能性がありそうである。水神窯跡の須恵器を考察した小林久彦氏は、東海地方の各窯跡の須恵器と埴輪資料との比較から、水神窯跡は三重県久居窯跡や藤谷窯跡との共通性が強く、これらの窯の影響下で成立し、陶邑窯からの間接的影響を考えた。[10]当窯の須恵器については、前述したように陶邑的なものを認めることから、その可否については即決できないが、埴輪については久居窯跡と藤谷窯跡との共通性が示唆されており、今後、間接的影響も考慮に入れて考える必要がある。

同じように、島根県日脚窯跡の須恵器を見てみよう。同窯の須恵器は、小型品の殆どにおいて器壁が肥厚する。蓋杯の底部・天井部は比較的平坦なものが多く、また、口縁端部は有段を意識しているとはいえ、器壁の厚みと関係してかなり鈍くなっている。全体的な組成においては陶邑窯ＴＫ四七型式の範疇で差し支えないが、陶邑窯からの直接的な影響と言うよりも、間接的な様相が強いと考えられる。やや異なるが、門生窯跡群の高畑地区の資料には、器壁を厚くして口縁端部の段が曖昧な当該期の蓋杯が混在しており、また資料数はわずかではあるが、大井窯跡群の須恵器にもこうしたものが含まれているため、これらの地域からの影響も考えられ、陶邑窯からの間接的な影響の可能性を指摘しておきたい。

四、須恵器生産の拡散

これまで述べてきたように、須恵器生産の第二の拡散期には多数の

窯が成立し、それもＴＫ二三型式と四七型式では成立の様相や、その後の様相が若干異なっていた。ここでは、五世紀の前半代から開始した須恵器生産の全体を通して拡散について整理しておこう。

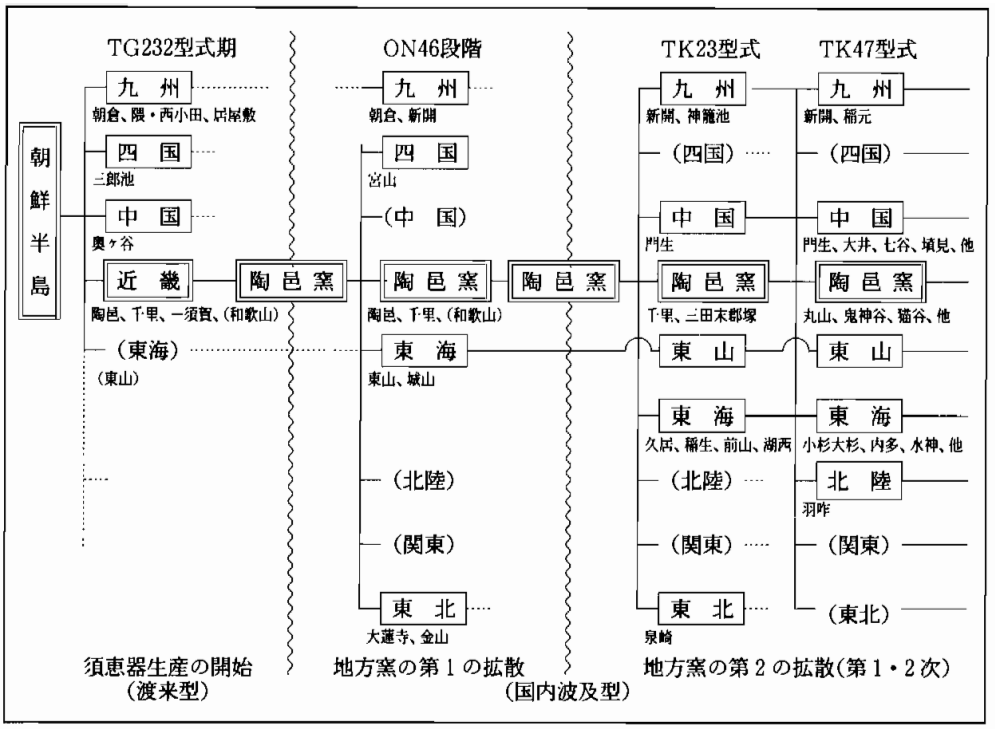
まず最初に、五世紀の前半代には、直接渡来した技術によって、須恵器生産が北部九州・中国・四国・近畿・東海（未発見）地方で開始する。その後、継続して操業されるのは、北九州・近畿・東海地方に限られ、その他の窯は短期に消滅している。

継続して操業されている窯を除いて、その後須恵器生産が成立するのは、ＯＮ四六段階である。第一図は、以前に発表した須恵器生産の開始期から第一・第二の拡散のモデルである。多少の変更を加えたが、基本的には変わりはない。ＯＮ四六段階の第一の拡散期には、陶邑的な様相をもつ須恵器が九州・四国・東海・東北で生産され始める。そして、次の第二の拡散期あたるＴＫ二三型式には、本稿で述べたように、九州・中国・近畿・東海、さらには東北地方においても生産が始まる。この期の窯には未発見のものが多く存在すると考えられ、空白地域の中国地方の山陽側や、四国・北陸・関東地方においても今後確認されるであろう。

現状の分布において考察をするのは危険であるが、ＴＫ二三型式の段階では、北部九州の新開窯跡・神籠池窯跡、山陰地方の門生窯跡、三田末郡塚窯、そして東海地方はやや近接して所在はするが、ほぼ旧国の範囲に重ならない形で窯が存在する様相が見られる。ＴＫ四七型式の段階には、さらにその様相がよく読みとれる。地域おいては拡大して旧国内に二ヶ所の窯が成立している場合もある。特に山陰地方では、日脚・門生・埴見・七谷窯跡、鬼神谷窯跡と、ほぼ均等に所在しており、旧国の範囲にほぼ該当する良好なモデルである。こうした状況は近畿地方でもいえ、三重県での状況がやや密ではあるが、東海地方でも言えそうである。北陸地方では、現在のところこの期のものは羽咋窯跡群に限られるが、その後のあり方は、山陰地方での状況に共通していると言える。

従って、こうした様相が第二の拡散期の本来のあり方を示している可能性があると考えたい。それは、地域によって多少の粗密はあるものの、ほぼ旧国範囲程度の密度で、全国規模で拡散が行われた可能性が強い。それが、ＴＫ四七型式段階を経て、さらに拡大していき、六世紀の末葉から七世紀段階には、旧国の中にも数群以上、場合によっては旧郡程度の範囲に一ヶ所は存在したと考えられる。

現状では、ＴＫ二三型式の段階の窯は、継続性の面においてやや乏しい。その状況は、第一の拡散期であるＯＮ四六段階に成立した窯と共通する特徴と言えよう。逆に、ＴＫ四七型式段階の窯は以後継続していくものが多い。これは、何を物語るのであろうか。臨時的な操業で役目を果たしたのか、あるいは良好な窯場選地の試行段階のためなのか、さらには以後の生産の準備や計画がなされいなかったのか、操業を継続する基盤がなかったのか等々、様々な推測が成り立つ。



第1図　須恵器生産の開始と地方窯の拡散模式図
（その他、渡来型には4C代の出合窯跡、ON46段階の市場南組窯跡がある）

ほぼ旧国程度の範囲で一窯が所在する可能性があることや、単発的な様相が強いとした第一の拡散期の窯と類似する点から言えば、極めて各地の首長や有力層の独占性が強かったと考えたい。手工業生産の掌握、とりわけ地方における掌握は、首長層の元で管理されたと考えられるため、見かけ上はこうしたあり方を示すと思われる。

ところがこの時期以降には、消費地において次第に須恵器の出土量が増してくるために、須恵器の必要性や需要度はかなり増大したことは確かである。TK二三型式の段階に比べて、TK四七型式の段階の窯が倍増していることとも比例している。

TK四七型式の段階に成立した窯は、現状では単発的なものも含まれるが、継続性をもつ窯跡が多数確認できる点が最大の特色である。TK二三型式段階で予測した首長層の独占性から、手工業生産は掌握しつつも、必需性と関係して次第に生産の拡大が図られ、生産集団の再編成が行われた。供給面においてもその範囲を広げていき、以降、継続して窯跡群が形成されたと考えられる。

こうして見ると、第二の拡散期は、前後の二段階に分けて考える必要がでてこよう。仮にここでは第二の拡散のTK二三型式段階を第二の拡散の第一次、TK四七型式段階を第二次として捉えておくことする。しかしそれは、五世紀後半代から六世紀初頭における一連の政策の中で行われた可能性があり、両者を区分して第二・第三の拡散とするものではない。ほぼ旧国程度の範囲毎に窯が成立していき、さらに

は定着していく過程を捉える手段として、また遅れて窯が成立する地域をこうした区分において把握するための手段である。内容の詳細や歴史的な位置づけは、今後の資料の増加を待って描かれる。[11]

現状では、やや遅れてMT一五・TK一〇型式の段階で生産が成立する地域もある。これには、新たに陶邑窯からの影響で成立する可能性がある一方で、前段階より周辺部で生産されていた地域の中で、分散・波及した窯が多くあると考えられる。従って、前述の統一的な拡散の範疇で捉えることは難しい。この点に関しては、第二の拡散の第二次としたTK四七型式段階の内容や、以後継続して操業された窯跡群の内容を整理し、さらに六世紀後半代にかけての社会秩序と関連させて検討しなくてはならない。

おわりに

以上のように、日本における五・六世紀の須恵器生産の拡散について述べてきた。第二の拡散では、第一の拡散にも増して多くの窯が成立したが、第二の拡散の第一次（TK二三型式）では、第一の拡散の拡散に似たあり方を示し、第二次（TK四七型式）では、定着型の様相を示し、以後継続するものが多く存在した。分布においてもほぼ旧国程度の密度で各地に成立したと考えられるが、今後の検討によってより具体的に議論していく必要性がある。

筆者は以前に、こうした拡散を古墳時代の手工業生産と政治秩序との関係で述べたことがあった。これは古墳時代における手工業生産の根本は、ヤマト政権に掌握され、それが拡散という状況によって一気に地方に広がったと判断され、地方の首長も手工業生産を掌握して行った。これはヤマト政権が政治的秩序を整備するための手段であったと考えた。須恵器生産の第一と第二の拡散は、漸進的ではなく、極く限られた時期に広がることは明白であり、こうした限定された時期に政策が採られた可能性が強いのである。

第二の拡散の第一次は、「ワカタケル」、雄略朝に該当し、中央権力体制の確立期に比定され、政治秩序の強化と地方経営の保持が予想される。この期には、一〇ヶ所以上の窯が成立しており、符合している。第二の拡散の第二次は、後続する時期である。同一地域内で再成立するものと、新たな地域で成立する窯とがあるが、第一次にも増して窯が成立していき、その範囲も拡がっていく。さらなる政治秩序の整備と地方経営が計られたと考えられるが、一方、以後継続する窯が多数存在することから、地方政策の浸透のもとで政治体制が完備され、地方における手工業生産の容認のもとに、分散化が進行していき、地方においては生産体制の再編成が行われるにまで至ったと考えられる。

第二の拡散の第二次は、一部が継体朝に重複すると予想される。この時代は、継体天皇の出自と大和進出における経緯、朝鮮半島諸国への干渉、磐井の反乱等から激動の時代とも言われ、混乱の終息後には、

より強固な政治体制が確立したと説かれている。こうした混乱期の中で、手工業生産と地方経営がどのように関連したかは不明であるが、須恵器生産の面においては確実に拡大しており、以後、各地に分散して定着していき、地方の社会秩序と手工業生産のあり方に大きな変化が認められるようになるのである。さらなるこの時代の歴史的な事象と、政治的背景の関連性を模索していく必要があろう。

［付記］本年度をもって、文化財学科教授古原宏伸・岡田英男先生がご退職されることになった。長年のご指導に対して厚く御礼申し上げ、両先生の末永いご健康とご多幸をお祈り申し上げます。拙稿が送別記念論集の片隅を汚すことをお許し下さい。

また、本文中の資料の収集には、伊藤厚史、岩橋孝典、田中秀和、谷口恭子、根鈴輝雄、信里芳紀、和気清章の方々にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

註

(1) 植野浩三「西日本における初期須恵器生産の開始と展開」『奈良大学紀要』第二一号　一九九三年。

(2) こうした考えは、早くから田辺昭三氏が論じており、「すぐれて政治的背景をもっていた」として、その展開を述べている。田辺昭三「須恵器生産の諸劃期」『日本美術工芸』三九二　一九七一年。同『須恵器大成』角川書店　一九八一年。拙稿の基本は、長年ご指導をいただいている田辺昭三先生の論によるところが多いが、資料の増加を加味して多少修正し、再考を試みた。

(3) 植野浩三「古墳時代の手工業生産と政治秩序－須恵器生産の展開を中心にして－」『文化財学論集』文化財学論集刊行会　一九九四年。

(4) 植野浩三「埴輪生産と須恵器工人－奈良県ウワナベ古墳の須恵器を中心にして－」『文化財学報』第一一集　一九九三年。

(5) 鈴木敏則「遠江の淡輪系埴輪」『転機』第三号　一九九〇年。同「伊勢の淡輪系円筒埴輪」『Mie history』vol. 3　一九九一年。

(6) 田辺昭三「須恵器生産の諸劃期」『日本美術工芸』三九二　一九七一年。

(7) 小林久彦「水神古窯における須恵器生産の系譜」『水神古窯』（『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書』第七集　豊橋市教育委員会　一九八七年）。同「伊勢湾周辺における須恵器の地域性－五世紀末から六世紀初頭を中心として－」『三河考古』創刊号　一九八八年。また、藤原学氏は陶邑窯の影響は認めつつも、東山窯の影響を多少考慮に入れる必要性を述べている。藤原学「伊勢湾西岸における古墳時代須恵器生産の動向」『紀伊半島の文化史的研究』考古学編　清文堂出版　一九九二年。

(8) 菱田哲郎「須恵器生産の拡散と工人の移動」『考古学研究』第三九巻三号　一九九二年。同『歴史発掘』一〇　須恵器の系譜　講談社　一九九六年。

(9) 山田邦和『須恵器生産の研究』学生社　一九九七年。

(10) 小林久彦、前掲註(6)。

(11) 第二の拡散の第一次・第二次は、現状の傾向として提示しておく。この二型式に亘る期間には、多少違った意図が含まれている可能性もあると考えている。

参考文献

各窯跡に関する資料は、主に以下の文献を参考した。その他、多くの論考が提出されているが、本稿では省略した。また、特に断っていない窯跡資料の一部は、地域おいて精度と内容の格差があるが、中村浩・他編『須恵器集成図録』一～六巻　雄山閣出版　一九九五～一九九七年を若干参考にした。

〈九州地方〉

神籠池窯跡：木下之治・小田富士雄「周辺の遺跡遺物」『帯隈山神籠石とその周辺』(『佐賀県文化財調査報告書』第一六集　佐賀県教育委員会)一九六七年。

小隈窯跡：平田定幸「朝倉の初期須恵器窯跡」『甘木市史資料』考古編　一九八四年。

佐藤正義『小隈窯跡群』Ⅰ(『夜須町文化財調査報告書』第一二集　夜須町教育委員会)一九八八年。

山隈窯跡：九州大学考古学研究室「山隈窯跡群の調査―福岡県朝倉郡三輪町所在の初期須恵器窯跡群」『九州考古学』第六五号　一九九〇年。

隈・西小田窯跡群：渡邊和子「九州地域(1)―隈・西小田地区遺跡群の窯跡」『陶質土器の国際交流』柏書房　一九八九年。

新開窯跡：小田富士雄「須恵器文化の形成と日韓交渉―西日本の初期須恵器の成立をめぐって―」『古文化談叢』第二四集　一九九一年。

中村勝「―筑紫の古式窯―福岡県新貝古窯跡群とその資料」『福岡考古』第一五号　一九九一年。

重留窯跡：横山邦嗣『重留窯跡』―重留古墳群C―二号墳・重留古窯址の調査(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第一七八集　福岡市教育委員会)一九八八年。

稲元日焼原窯跡：伊崎俊秋・原俊一『稲元日焼原』(『宗像市文化財調査報告書』第二二集　宗像市教育委員会)一九八九年。

牛頸窯跡群：副島邦弘・舟山良一他『牛頸中通り遺跡群』(『大野城市文化財調査報告書』第四集　大野城市教育委員会　一九八〇年。

小田富士雄他『野添・大浦窯跡群』(『福岡県文化財調査報告書』第四三集　福岡県教育委員会)一九七〇年。

八女窯跡群：小田富士雄他『中尾谷窯跡群』(『八女古窯跡群調査報告』Ⅱ　八女市教育委員会)一九七〇年。

裏ノ田窯跡：酒井仁夫『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』XⅦ　福岡県教育委員会　一九七七年。

居屋敷窯跡：副島邦弘他『居屋敷遺跡』(『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告書』第六集　福岡県教育委員会)一九九六年。

〈中国・四国地方〉
戸瀬池窯跡：岡田博「佐伯町矢田部所在の戸瀬池窯址の出土遺物について」『岡山県埋蔵文化財報告』一三　岡山県教育委員会　一九八三年。
木鍋山一号窯跡：江見正巳「木鍋山一号窯」『岡山県史』一八　考古資料　一九八六年。
奥ヶ谷窯跡：柴田英樹「奥ヶ谷窯跡」『中国横断自動車道建設に伴う発掘調査』四（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』一二一　岡山県教委員会）一九九七年。
日脚一号窯跡：川原和人・丹羽野裕『日脚遺跡』―日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書　島根県教育委員会　一九八五年。
深谷窯跡：柳浦俊一「出雲地方の須恵器生産」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会　一九八六年。
大井窯跡群：柳浦俊一「出雲地方の須恵器生産」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会　一九八六年。
門生窯跡群：丹羽野裕「門生黒谷Ⅰ遺跡」『島根県教育庁文化課埋蔵文化財センター年報』Ⅲ　一九九五年。
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　一九八一年。
埴見窯跡：亀井熙人「鳥取県の古代窯業遺跡」『郷土と科学』第一六巻一号　一九七〇年。
清水真一編『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』鳥取県教育委員会　一九八四年。
七谷窯跡：谷口恭子「鳥取県東部出土の須恵器―陶邑Ⅰ期を中心として―」『水曜考古』第一二号　水曜考古倶楽部　一九八七年。
三郎池西岸窯跡：松本敏三他「三谷三郎池西岸窯跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』昭和五八年度　香川県教育委員会　一九八四年。
宮山一号窯跡：松本敏三「讃岐出土の須恵器　宮山窯跡の須恵器」『瀬戸内歴史民俗資料館年報』七　一九八二年。
黒藤窯跡：松本敏三他「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ」『瀬戸内歴史民俗資料館紀要』Ⅱ　一九八五年。
〈近畿地方〉
那波野丸山窯跡群：森内秀造「窯跡資料」『相生市史』第五巻　一九八九年。
金ヶ崎窯跡：山下俊郎他『赤根川・金ヶ崎窯跡』明石市教育委員会　一九九〇年。
三田末郡塚窯跡群：井守徳男他『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書』一（『兵庫県文化財調査報告書』第五〇冊　兵庫県教育委員会）一九八七年。
出合窯跡：亀田修一「神戸市出合窯跡」『討論会　須恵器の始まりを考える』吹田市立博物館　一九九三年。
藤原学・中村浩編『須恵器集成図録』第二巻　近畿編Ⅱ　雄山閣出版　一九九六年。
猫谷窯跡：芦田茂『長者ヶ谷一号墳』（『西紀、丹南町文化財報告』第八集　西紀、丹南町教育委員会）一九八九年。

鬼神谷窯跡：菱田哲郎他『鬼神谷窯跡発掘調査報告』（『竹野町文化財調査報告書』第七集　竹野町教育委員会）一九九〇年。
中尾窯跡：菱田哲郎他『鬼神谷窯跡発掘調査報告』（『竹野町文化財調査報告書』第七集　竹野町教育委員会）一九九〇年。
千里古窯跡群：柳本照男・木下亘他『桜井谷窯跡群二―一七窯跡』―府立小路高等学校建設に伴う調査報告―（『豊中市文化財調査報告』第九集　小路窯跡遺跡調査団）一九八二年。
藤原学・中村浩編『須恵器集成図録』第二巻　近畿編Ⅱ　雄山閣出版　一九九六年。
陶邑古窯跡群：田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　一九六六年。
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　一九八一年。
岡戸哲紀・藤田憲司他『陶邑・大庭寺遺跡』Ⅳ　近畿自動車道松原・すさみ線建設に伴う発掘調査報告書（『㈶大阪府文化財協会発掘調査報告書』第九〇輯　㈶大阪府文化財協会・大阪府教育委員会）一九九五年。
沙羅谷窯跡：武内雅人「和歌山県における発生期の須恵器窯」『和歌山県埋蔵文化財情報』一七　社団法人和歌山県文化財研究会　一九八五年。
藤原学・中村浩編『須恵器集成図録』第二巻　近畿編Ⅱ　雄山閣出版　一九九六年。
園部窯跡群：丸川義広「口丹波における須恵器生産の開始」『盾列』創刊号　奈良大学考古学研究会　一九七五年。
山田邦和「丹波の須恵器生産覚書―京都府園部窯址群の再検討―」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ　一九八七年。
泉窯跡：林純「近江における古墳時代須恵器生産の特質」『滋賀考古』第六号　一九九一年。
畑中英二「滋賀県甲賀郡水口町泉古窯採集遺物の検討」『滋賀文化財だより』二一六～二一八　一九九五年。
鏡山窯跡群：林純「近江における古墳時代須恵器生産の特質」『滋賀考古』第六号　一九九一年。
〈東海地方〉
久居窯跡群：小玉道明・山沢義貴『久居古窯址群発掘調査報告』二号窯、四号窯　久居古窯址群発掘調査団　一九六八年。
藤谷窯跡：吉村利男・萱室康光「三重県津市藤谷の埴輪窯跡」『日本考古学協会昭和五三年度大会発表要旨』一九七八年。
岡田登「三重県津市発見の埴輪窯について―藤方の贄土師部との関連をめぐって―」『皇学館論集』一五―二　一九八二年。
内多窯跡群：浅生悦生・田中秀和「考古編」『安濃町史』資料編　一九九四年。
徳居窯跡：藤原学・中村浩編『須恵器集成図録』第二巻　近畿編Ⅱ　雄山閣出版　一九九六年。
稲生窯跡：小玉道明「三重県鈴鹿市稲生山古窯址群発掘調査報告」『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第五号　一九九六年。

小杉大谷窯跡：小玉道明他『小杉大谷窯址』（『四日市市埋蔵文化財調査報告』九　四日市市教育委員会）一九七四年。
東山窯跡群：齋藤孝正「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部論集』ＬＸＸＩＶ　史学二九　一九八三年。
荒木実『東山古窯址群』一九九四年。
下原窯跡群：楢崎彰一他『愛知県古窯跡群分布調査報告』Ⅲ　愛知県教育委員会　一九八三年。
城山窯跡群：七原恵史他『尾張旭市の古窯』尾張旭市教育委員会　一九七八年。
卓ヶ洞窯跡群：七原恵史他『尾張旭市の古窯』尾張旭市教育委員会　一九七八年。
前山窯跡：杉崎章他『常滑市史』文化財編　常滑市役所　一九八三年。
上向イ田窯跡群：森鋼一他『愛知県豊田市来姓遺跡群・上向イ田窯址群』猿投町誌編集委員会　一九六九年。
水神窯跡：贄元洋・小林久彦他『水神古窯』（『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書』第七集　豊橋市教育委員会　一九八七年）。
湖西窯跡群：後藤建一・高橋一敏『西笠子第六四号窯跡発掘調査報告書』湖西市教育委員会　一九八七年。
有玉窯跡：後藤建一・高橋一敏『西笠子第六四号窯跡発掘調査報告書』湖西市教育委員会　一九八七年。
安久路窯跡：佐口節司『安久路古窯発掘調査報告書』磐田市教育委員会　一九八七年。
衛門坂窯跡：永井義博「衛門坂窯跡出土の須恵質埴輪について」『古代学研究』一一九　一九八九年。『衛門坂古窯跡』袋井市教育委員会一九八九年。

〈北陸地方〉

興道寺窯跡：入江文敏・森川昌和「興道寺窯跡の試掘調査」『重要遺跡緊急確認調査報告』Ⅱ　福井県教育委員会　一九七九年。
鎌谷窯跡：久保智康「越前・若狭における在地窯の出現」『北陸古代土器研究』創刊号　一九九一年。
小松窯跡群：望月精司他『二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』小松市教育委員会　一九九〇年。
木立雅朗「加賀・能登における在地窯の出現」『北陸古代土器研究』創刊号　一九九一年。
羽咋窯跡群：福島正実他『柳田タンワリ一号窯跡』石川県立埋蔵文化財センター　一九八二年。
鳥屋窯跡群：浜岡賢太郎他『能登鳥屋窯支群の調査（第一次）』（『鳥屋町文化財報告』第一集　鳥屋町文化財保護協会　一九六五年。
園カンデ窯跡：西井龍儀他「氷見市園カンデ窯跡」『大鏡』第一二号　一九八八年。
西井龍儀「越中における在地窯の出現」『北陸古代土器研究』創刊号　一九九一年。
松ノ山窯跡：笹沢浩・原田勝美「長野県下出土の須恵器」上・下　『信濃』

第二六巻九・一一号　一九七四年。

〈関東・東北地方〉

桜山窯跡群：水村孝行他『桜山窯跡群』（『㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第七集　㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団）一九八二年）。

泉崎窯跡：日黒吉明「古式須恵器」『文化福島』第一〇八号　福島県文化センター　一九八〇年。

石本弘「福島県の古式須恵器」『第八回三県シンポジュウム　東国における古式須恵器をめぐる諸問題』第二分冊―各県の動向―　北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所　一九八七年。

大蓮寺窯跡：渡邊泰伸他『陸奥国官窯跡群』Ⅱ（『古窯跡研究会研究報告』第四冊　古窯跡研究会）一九七六年。

金山窯跡：齋藤秀寿「仙台市金山窯跡出土の古式須恵器」（『陸奥国官窯跡群』Ⅳ　『古窯跡研究会研究報告』第六冊　古窯跡研究会）一九八一年。

〔追記〕

本稿校正中に、MT一五型式に該当する資料であるが、次の窯跡の欠落に気づいた。採集資料ではあるが、伊賀地域では現在のところ最古に属し、伊勢地方の窯跡を考える上でも貴重なため、記しておくことにする。

二ツ峠窯跡（三重県上野市依那具所在）：山本雅靖「伊賀二ツ峠古窯址の遺物」『大阪文化誌』第一八号　一九八五年。